新刊紹介

教育學の對象と方法

文學士　伊藤猷典著

私は伊藤君の後輩として、友人として、伊藤君の此の新著を世に紹介することを心から喜ぶものである。伊藤君としては、必ずしも最初の著ではない。しかし伊藤君が教育學上、獨自の世界を開き、今日まで他の學者達がさほど注意しなかつた一つの新しき道を、伊藤君自ら切開いて、學界に著しい貢獻をされたものとして、將又、伊藤君自らが多くの抱負自信をこの新著に掛けて居られる點に於て、この著は、伊藤君にとつて右の意味での最初の力作であらうと信ずる。

我が國では今日までに教育學に關する論著が非常に多く公にされてゐる。しかしその中で教育學の根本問題に突進して、その眞髓を捉へやうと試みた著述はどれ位有らう。教育の實際論に關する著述は極めて多いが、實際活動の基礎的研究になると非常に少い。更に教育學の中心問題そのものを研究して公表された著述は寥々として稀である。況や中心問題の研究それだけを任務として脇目もふらずに直進された學者は果して我が國に幾人あるか。多士濟々たる我が國の學界に必ずしもその人は少くないであらう。しかし不幸にも私は寡聞にして多くを知らない。

この著は教育學を科學的に建設せんことを目的とし「專門家には無論のこと凡そ常識を有する人であらば誰でも知つてゐるやうな平凡な問題を自分自身の立場から科學的に組立てるにあつた、搖ぎなき根抵を捉へ、それより生ずる必然的な論理的過程を遺漏なく開展さして自分自身の世界を作るにあつた。力を籠めたのは結論よりは寧ろ結論に到るの論理的過程であつた。過程に間隙を生じないためには周知の事柄でも取入れて前後を繋ぐの楔となす必要があつた。」これが氏が研究態度であり、本書論述の主義であつた。

まづ始に「第一生命の見方——人生論」と題する章に於て、教育とは人が人に對する關係であるから、人間について研究する必要ありとし、人間の類概念たる生命について研究してある生命について機械的に見る人もあり、目的論的に見る人もあつて、生命の見方は色々あるが、最も正しい見方は「生命をば目的を追ふ統一體と見ること」である。その目的についても色々の考へ方はあるが、人は客觀的價値を追求して歷史的生活をなすものと見るのが最も優れてゐる。この歷史生活中に價値を實現したのが文化である。

次に「第二教育の本質」の章で、かゝる歷史生的の中で、如何なるものを指して教育と言ふか。本章ではそれを研究してあるが、まづ教育者と被教育者とが結合すべき必然の理由を說き次に教育者が被教育者を助成すべき必然の理由を說き、次第に

論理的考察を壁みあげて、教育の概念を、價値の實現を究竟目的とし、教育者が被教育者の天職を果すやうに自覺的に、繼續的に、内面的に助成し、その力を發展させるのが教育であると定めてある。

最後に「第三教育學の對象と方法」に於ては、前二章に於て論究した事を基礎として、教育學の中心問題を述べてある。曾てヘルバルトが教育の主要問題を目的と方法とに立ててより此の方、永い間、教育學者の研究の目當はこの二問題であつた。しかし今日では、教育學の中心として研究すべきは教育作用そのものである、目的や方法は末の問題であると考へられるやうになつた。つまり從來は教育作用は自明のことと信ぜられてゐたが、今日ではその自明の事と思はれたものを、穿鑿し始めたのである。それについては教育作用そのものが、教育學の對象として、他の諸科學の對象と如何なる差があるか。この異同を檢討し、遂に教育作用は啓發的構成的であるから、教育の對象はこの領域中に存する筈であり、從つて教育學は啓發的構成的形態科學に屬するものであると斷定してある。構成的形態科學とは新しい學用語であるが、形態科學とはチーリッヒが新しく唱へた名稱である。自然科學に歴史科學との中間に立つものであり、形態とは一般法則的なものが個々の場合に表はれたものといふ。それは個別性を持つてゐるが、しかもその中に一般性を具有する。又歴史科學の繼續といふ概念は完結したものではないが、形態を完結してゐる。形態科學の中心目的に從つて實在を組立るのを構成科學と云ひ、教育學はかゝる科學の一つであるといふのである。特に「シュプランガーやエーミシュテルンの高唱する生活型の教育學もかゝるタイプの教育學に最もよく當嵌るものであらう」といふ意味の語で最後を結んでである。

尙附錄として嘗て哲學研究に連載された「教育目的としての價値體系」といふ論考を載せてある教育目的の中心的客觀價値の何物であるかは、此の著の本論では明かにしてなかつた。この附錄に於ては宗教を以て中心價値と解決してあるので、言はゞ本論第二章を補充する論述と見做してもよい。

この書は多くの學者の色々の著述や論文を讀みこなして我がものとし、極めて秩序的に教育學の質性を闡明した點にある。この點に於て伊藤君の秩序正しく、苦しい學究に耐へ忍んで研究を續けられた事は、この研究の結果に同感する人も、しない人も、恐らく讃辭を惜まないであらう。

終に一二苦言を呈したい。私は本書の内容に具つてゐる價値を十分に認め、その内容に心から賛同する一人であるがこの著者の文章については、私は數年間親しく交つて、他の人以上に馴れてゐる積りではあるが、尙本書の所々で一二行とか三四行とか、意味の解しにくい所がある。それから誤植が多い。外遊にさし迫つて出版された爲、十分校正する暇もなかつた事と察するが、この好著にして、この語學的缺點があるのは誠に惜しい。第二版の時訂正されたらと切に希望する次第である。(定價貳圓、東京市神田區錦町三丁目　教育研究會發行、高橋俊乘)